



北海道バスケットボール協会  
指導者育成専門委員会  
2014/04/06(日)

タクティクス (HBA指導者育成専門委員会ブログ)

NO. 141

平成25年度第26回北海道高等学校バスケットボール新人大会  
2月6日(木)～9日(土) 苫小牧市

指導者育成専門委員会 前野 和義

「雪まつり」「冬まつり」「氷まつり」等々、北海道特有の冬の催しが、各地で繰り広げられ、そして「SOCHIオリンピック」もああ華々しく開催されました。そのにぎわいの中、本年は苫小牧市を会場として今大会が開催されました。苫小牧市総合体育館を中心に5会場6コートで熱い戦い続けました。特に風雪寒冷悪路の中オフィシャルなどで協力をして頂いた地元生徒諸君、そして応援頂いた保護者の皆様には深くお礼申し上げます。

各試合では技術の質や体力的な部分において、まだまだ未完成のこの時期ですが、新人戦らしいはつらつとしたプレーが随所に見られた大会でした。6月の北見で開催されるインターハイ予選に向かって、それぞれの事情に合わせたチーム目標を設定し、更なる競技力の向上のために奮闘して頂きたいと思います。

【男子の部】

優勝 東海大学附属第四高等学校  
準優勝 札幌工業高校  
3位 駒沢大学附属苫小牧高等学校  
4位 札幌月寒高等学校

決勝	東海第四	96-45	札幌工業
準決勝	東海第四	89-49	札幌月寒
〃(延長)	札幌工業	71-69	駒沢苫小牧
3.4位戦	駒沢苫小牧	74-72	札幌月寒

【大会総評】

優勝した東海第四は前チームからのスタートメンバーであった内田、白旗両選手の安定したプレー振りで、他のチームを圧倒する。特に過日行われたウインターカップでも正確なシュートで、北陸戦を互角に戦えた一つの要因として白旗選手のシュートであったと思う。今大会でもそのプレー振りは、チームオフENSEの軸として大いに力を発揮していた。準決勝と決勝共強いディフェンスで相手の失点を50点以下に抑えたことは大いに評価できる。またリバウンドボール、ルーズボールに対しての意欲とボール保持力の高さは他チームも大いに見習うべきであろう。速攻にまだ安定さが欠けるが1年生の辻選手の成長によって、速いトランジションゲームに一層の精度が上がるものと思う。

札幌工業は辛くも準決勝で勝ちを拾い決勝に駒を進める。徹底してシューターを軸にしてゲーム展開をするチームだけに2年菅原、1年濱尾選手のでき次第で様相が急変することがある。決勝では東海の強いディフェンスでどうしてもドリブルが多くなり、リズムの

あるシュートを打たせてもらえない状況であった。#4板橋選手、#8沼田選手がもっとボールに絡んでくると更にチーム力が上がるものと思われる。ともあれ今大会での第2シードとしての地位を得て、結果準優勝は立派なものである。

駒沢苫小牧は函館有斗、旭川工業そしてシード校の旭川大学と強豪高校に圧勝してのシード権獲得は立派なものであった。しかし準決勝の札幌工業戦が悔やまれるゲームとなる。札工は#7菅原のショットに頼る展開であり、駒沢は終始ゲームを支配していただけに延長にもつれ込んだことが残念であった。延長に入った原因はガード2枚を下げていたことによるプレスダウンのパスミスであった。選手コンディションに何か不具合があったと思うが、延長でも高橋、小辻のガード陣で勝負に出られなかったことはやはり悔やまれる。フリースローのミスがあったものの、それはよくあることでベンチとしては想定内として考えるべきであろう。『勝ちたい』と思うことよりも、『負けない』と思う気持ちである。

3・4位戦の月寒戦では、ベンチも同じ轍を踏まないゲーム展開で、スタートメンバーを最後まで信頼して、ぶれることなく接戦を勝利に導き、開催地元チームとして大いに会場を沸かせ奮闘してくれた。

札幌月寒はボールハンドリングに長けており、シュートも上手く素晴らしい個人技を持っている。また、ゲームの緩急の付け所もあり、選手のアイディアとしてよく表現されていたと思う。しかしゲームの仕上げの段階で今回はうまくいかなかった様に思う。特にゲーム終盤のラストプレーであったサイドスローインからのショットプレーがインサイドの無理なシュートで終わったことが残念であった。サイズのないチームのゲームの仕上げは本当に苦労することで大変であると思うが一層の工夫と努力を願うところである。

今大会の敢闘賞は北海高校であった。初戦帯広白樺高校に逆転で勝利(66-63)その勢いで札幌日大と三回戦に進める。特に白樺戦では速いシュートセレクションで勢いのあるオフェンスを展開して白樺のペースを崩しての逆転勝利であった。白樺も良い選手が揃ってイージーなショットミスが多発してしまい残念であった。次回の巻かえしに期待したい。

シード権を失った旭川大学高校も、相手ディフェンスを崩し切れない状態での攻撃が多く勝負所で崩れる。攻撃の軸がはっきりしなかったように見えた。

久しぶりに出場した函館ラ・サールの三回戦進出は立派であった。

他、恵庭南、海星も6月までには一層の力をつけてくるものと期待したい。

## インターハイ予選『北見で会いましょう』

吉井四郎著 『良いシューター作り』から

日本のバスケットボールは、チームにシューターが現れ始めてから弱くなり始めたと言いたい。これはシューターを非難しているのではない。シューターの華々しさにすべてのプレーヤーが憧れ、地味ではあるがゲームに勝つためにはそれと同じように、あるいはそれ以上に大切なリバウンドとかディフェンスで頑張るといことが軽視されつつあることを警告したためである。